

松籟・石塚三郎先生遺稿の漢詩*1 ～月刊「自治」に投稿した詩文～

新潟県・新発田市 佐藤泰彦 佐藤 禮*2

要旨：石塚三郎が新潟県歯科医師会々長を辞し、衆議院議員に立候補し、初当選した頃から新潟県町村会々長が発行している月刊誌「自治」の「文苑」欄に投稿した漢詩について詳解した。

キーワード：松籟・石塚三郎、遺稿漢詩

Abstract：Since Dr. Saburo Ishizuka resigned the Presidency of the Niigata Dental Association, and succeeded the election for the Lower House, Imperial Diet, he began to contribute his Chinese-classics poem to the monthly Journal "Jichi" issued the Niigata-ken local governments director.

The present authors detailed interpretation for the Dr. Ishizuka's works are described some what in detail.

Key Words：Shorai, Saburo Ishizuka, Chinese-Classic Poems of the late Dr. Ishizuka

1. はじめに

石塚三郎は、明治23(1890)年春、新潟県北蒲原郡安田村立高等科小学校(現・阿賀野市)を卒業し、地元の素封家・旗野家へ奉公に入り、働き乍ら漢詩や英語を学んだ。

当時、旗野家の裏に「峨洋吟社」と云う書楼あり、森春海、日下部鳴鶴などの知名詩人が出入りしていたので、墨すりをし乍ら漢詩を勉強する事ができた。更に、明治26(1893)年、上京した時も市嶋謙吉や吉田東伍の知遇を得、大成学館国語傳習所事務見習として勉強する事ができた。

明治30(1897)年、念願叶って高山歯科医学院

に学僕として採用された頃には、相当高度な漢詩を日常的に作詩していたようである。

明治31(1898)年11月、血脇先生と清国で歯科診療に活躍した1年間は、本場の漢詩を学びとり、さらに蘊奥を極められたものと考えられる。

2. 経緯と概要

吉田東伍記念博物館(現・阿賀野市、本誌第24巻1号、第25巻4号参照)に元首相・若槻禮次郎から石塚三郎宛の書翰(昭和23年1月10日付)と漢詩6首を表具した巻物一幅が収蔵されている。

書翰によると、漢詩について「朱批御願被下度切望堪不矣」とあり、所謂「添削」の依頼である。これについて、どの様に対応したか不明であるが、戦後、土居晩翠などの知名文化人や漢詩同門の方々が石塚家に出入りしていた事は、筆者の遠い記憶として残っている。

一方、新潟県立図書館収蔵の月刊「自治」(大正14年～昭和11年の12年間、内昭和2年分が欠

*1 Studies on the chinese Classics Poem by "SHORAI" Saburo Ishizuka～to the "Jichi" Montly Magazine～

*2 Yasuhiko SATO and Rei SATO, Shibata, Niigata
本稿要旨は第33回日本歯科医史学会総会並に学術大会於東京歯科大学血脇ホール(2005年10月1日)に於て口演した。

落)の「文苑」欄に漢詩、和歌、狂歌、俳句が掲載され、漢詩の部に「松籟・石塚三郎」「松籟・石塚 参」「石塚松籟」の名で13回に亘り合計19首投稿、掲載されている事が判明した。

3. 石塚三郎 12 年間の軌跡

この時期は、石塚三郎にとって人生最大の転換期であったと考えられる。

即ち、大正13(1924)年5月17日、新潟5区より衆議院議員に立候補し初当選。7月1日付で新潟県歯科医師会々長を辞任した。

大正14(1925)年2月7日、国会に於て歯科医師法改正法案を提出。これの主旨説明を行い、成立させたのである。

個人で建議案を出して成立をみたのは議会始まって以来、初めてであり当時評判になったという。

昭和2(1927)年、円滑な議員活動をする為、四ツ谷(新宿)区内藤町に移転。

昭和3(1928)年、新潟2区から立候補。当選2期目を迎え愈々議員活動が軌道に乗りつつあった時、盟友・野口英世博士が急逝したのを機に「野口英世記念会」の設立、「野口英世記念館」の建設、そして「パプラール」の研究と完成の為、昭和7(1932)年、2期8年務めた代議士の立候補を辞退した。

然し、歯科医師としての職業は捨てがたく、昭和9(1934)年、東京市歯科医師会四ツ谷支部長に就任(在任2年)。

さらに、昭和12(1937)年、診療所を赤坂(港区溜池町)に移転し、翌年、新潟市上大川前通の石塚歯科病院を閉鎖し、東京のみとなる。

この激動の時期、寸暇を割いて作詩に没頭し、これを吟じることによって「氣」を取り込み、リラックスし逆にストレス解消にもなったのではなかろうか。

4. 詩文の表題別分類

投稿した詩文を表題別に次の様に分類した。

1) 歳晩書懷。すなわち、年の暮に当って思いを詩にしたもの。4首。

2) 歳旦。新らしい年を迎えてお目出たい思いを詩にしたもの。5首。

3) 聴鳥。杜宇や鶯のさえずりを詩に託したも

の。2首。

4) 景色。山川の景色、草木の美くしさを詩にしたもの。2首。

5) 其他。6首となるが、それぞれ奥が深く、簡単に分類できるものではないと考えられる。

5. 漢詩文の読みと解説

1) 「自治」大正14(1925)年2月1日発行第2巻・第2号「文苑」62頁掲載

晩秋與松山如水両詞兄

遊米崖帰途松山有作則次

松籟・石塚 参

嵐溪楓色水西東 山径蕭蕭殘日紅

自是飄輪三十里 奔湍奇嶂暮雲中

(読み)

バンシユウ ショウザン ジョスイリョウシ ケイ ペイガイ アソ キ トシヨウ
晩秋、松山・如水 両詞兄 ト米崖ニ遊ブ。帰途 松
山作有リ則チ次ス。

ランケイ フウシヨクミズセイトウ サンケイシユクシユク ザンジツクレナイ
嵐溪ノ楓色水西東。山径蕭蕭シテ残日 紅
ナリ。是レ自リ飄輪三十里。奔湍奇嶂暮雲ノ中。

(解説)

晩秋、松山(人物像不明)と如水(散史とも云う。本名・田宮從義、北蒲原郡中曾根村(現・新発田市)の出身、西蒲原郡長、南蒲原郡長を歴任、「文苑」に屢々投稿している)の両詞兄と米崖(現在のJR北陸線・柏崎駅から米山駅に至る日本海沿岸の番神岬、福浦狸々洞、鷗ヶ鼻、米山崎や「米山さんから雲が出た…」で有名な米山、標高993メートルを背景にした風光明媚な断崖のある所の総称)に遊びに行った帰り際、松山が一首作詩したのに合わせて私も次の詩を作った。

靄の立つ谷川の楓は美しく色づき、川の流れが幾重にも折れ曲がって西や東に蛇行している(青海川と思われる)。

山の小径は物寂しく、夕日が赤く輝いている。これから汽車で30里(漢詩の世界では、1里約500メートル)ほど行く事になるが、急流や屏風の様に切り立った珍らしい峰々は既に夕暮の雲の中に聳え立っている。

2) 「自治」昭和6(1931)年2月1日発行第8巻・第2号「文苑」61頁掲載

社頭雪

松籟・石塚三郎

四面寒光凝不融 擁祠樹竹玉玲瓏

絨塵不動神靈境 六出如華舞碧空

辛未歳旦

瓶裏梅花與歳新 団欒家宴祝佳辰

吾儂幸有天倫楽 慈母剛迎米寿春

(読み)

社頭ノ雪

四面ノ寒光凝リテ融ケズ。祠ヲ擁スル樹竹玉玲瓏。

纖塵動カズ神靈ノ境。六出華ノ如ク碧空ニ舞ウ。

辛未歳旦

瓶裏ノ梅花歳ト共ニ新タナリ。団欒ノ家宴佳辰ヲ祝ウ。

吾儂幸有リ天倫ノ楽。慈母剛ニ迎ウ米寿ノ春。

(解説)

米寿を迎える母親に逢う為に帰省し、安田の鎮守・神明神社に参拝した時、神社周辺の雪景色の情景を表現したものと考えられる。

辺り一帯の寒々とした景色は、まるで氷が溶けないでカチンカチンに固まっているようである。境内の社を掩う樹竹は玉の様にあでやかで美しい。

細かな糸屑でさえも、静止していて神が宿っている様だ。雪は花のように青空に舞っている。

かのとひつじ年の元旦を迎えて。

花瓶に挿した梅の花は、新らしい年に仲間入りしているようだ。家族仲良く揃っての宴は、佳き日を祝っている。

私を含めて人それぞれ天から与えられた楽しみがある。

慈母は元気で米寿の春を迎える事ができた。

3)「自治」昭和6(1931)年10月16日発行第

8巻・第10号「文苑」66頁掲載

晩濱口前首相

松籟・石塚 参

首班臺閣翼皇猷 清白至誠無匹俦

何料一丸空隕命 万民哀惜涙雙流

欽君氣節肅如霜 一代誠忠名姓香

涙隕青山埋骨処 秋風八月轉荒涼

(読み)

濱口前首相ヲ輓ス

首班ノ臺閣皇猷ヲ翼ケ、清白至誠匹俦無シ。何ゾ料ラン一丸隕命ヲ空ス、万民哀惜シ涙雙流ス。

君ヲ欽ウ氣節 肅ニシテ霜ノ如シ、一代ノ誠 忠
名姓 香シ。
涙ハ青山埋骨スル処ニ隕、秋風八月 轉 荒涼。

(解説)

「濱口前首相の死をいたむ」

昭和5(1930)年11月14日、当時の内閣総理大臣・濱口雄幸が東京駅頭で佐郷屋留雄にピストルで狙撃され重傷、病状悪化し昭和6(1931)年8月26日、62歳で逝去した。

かつての民政党同志として哀惜の詩を捧げた。

内閣総理大臣の指名を受け、天子のまつりごとをお助けし、清廉潔白で至誠に溢れていることは、他に比べる人がいない。

処が、何で唯一発の凶弾が命を奪って終ったのか。真に惜しみて余りあり、万民は死を悼み、悲しさで悔しさで涙がはらはらと流れ落ちるのである。

天皇を敬うその意気と節操は、霜の様に厳しく静であり、一生の誠忠を貫いたその名声は芳しい。

涙がはらはらと墓地に落ちて、秋風の吹き始める八月は、益々荒涼としても寂しい光景である。

4)「自治」昭和7(1932)年7月1日発行第9

巻・第7号「文苑」65頁掲載

緑陰聴鶉

松籟・石塚 参

緑陰深鎖小柴扉 髣髴千聲杜宇飛

憶昨麻溪南浦夕 雲埋老樹月依微

新樹埋庭帶夕陰 三春一夢感方深

不如歸去聲何處 知否都門作客心

山樓是處絕塵氛 薄夜模糊望不分

月欲明兮星欲動 一鵲啼破萬重雲

(読み)

緑陰ニ鶉ヲ聴ク

緑陰深ク鎖ス小柴ノ扉、髣髴タリ千聲杜宇ノ飛
ブラ。

憶ウ昨、麻溪南浦ノ夕、雲ハ老樹ヲ埋メ、月 微
ニ依ル。

新樹庭ヲ埋メ夕陰ヲ帶ビ、三春ハ一夢感方ニ深
シ。

不如歸ニ如カズノ聲ハ何レノ処ゾ、知ルヤ否ヤ都
門客ト作ル心ヲ。

山樓是ノ處 塵氛絶エ、薄夜模糊トシテ望ミ分カ
タズ。

月明ラカナラント欲シ星動カント欲ス、一鵲啼

ハ マン エ グモ
破ス萬重ノ雲。

(解説)

青葉の陰にほととぎすの聲を聞く。

青葉の陰は深々として粗末なあばら家の柴の扉を掩っている。

ほととぎすが、多くの声を出して飛んでいるのを聴いていると、昔の支那の麻溪や朝鮮の南浦の夕方を思い出す。雲は老樹をおおい月は淡くおぼろに見える。

新らしい芽ぶきの樹木は、庭を覆い黄昏を帯びている。春の三ヶ月は夢の様に過ぎ去り、感慨まさに深いものがある。

帰去に如かずという聲は何處から聞えてくるのか。ほととぎすよ、私が客となって都に出てきて故郷をなつかしむ気持ちは解らないだろう。

山樓のあるここは、けがれた気配もなく、たそがれ時はぼんやりとして見晴らしもはっきりしない。

月は明るく照らそうとし、星は動こうとしている。一羽のほととぎすが、幾重にも重なる雲を破るように鳴き叫んでいる。

5)「自治」昭和8(1933)年2月1日発行第10

巻・第2号「文苑」26頁掲載

歳晩書懷

松籟・石塚三郎

自入都門既十年 払衣何日賦帰田
耿兮一片猷芹志 残夜空遭燈影憐

朝海

節入新正万物和 普天率土遍恩波
洋々東海碧千頃 蘸得紅暎瑞色多

(読み)

サイバンシヨカイ
歳晩書懷
ト モン イ ヨ スデ ジュウネン コロモ ハラ イズ ヒ
都門ニ入りテ自リ既二十年、衣ヲ払イ何レノ日
ニカ帰田ヲ賦サン。
コウ イツベン ケンケン シ ザン ヤムナ ア トウエイアフ
耿タリ一片ノ猷芹ノ志、残夜空シク遭ウ燈景憐
レナリ。

アサ ウミ
朝ノ海
セツ シンセイ イ バンブツナゴ フ テンソツ ド オン バアマネ
節ハ新正ニ入りテ万物和ミ、普天率土恩波遍シ。
ヨウヨウ トオカイセンケイ アオ サン エ コウトン ズイ
洋々タル東海千頃ニ青シ、蘸シ得タリ紅暎ハ瑞
シヨクオオ
色多シ。

(説明)

年の暮に当って思いを述べる。

都に来てから既に十年経過した。衣の塵を払い引退する何時の日か故郷に帰り、詩を作りたいも

のだ。

明らかなのは、我が志の一片でも誰かに傳えた
いのだが、夜明けになって燈影と空しくも相対す
るのが何とも侘しいものである。

年の始めの日の出の海

季節は正月となり、萬物はなごみ、あまねく広
い国中は天子の恵みが行き亘っている。

洋々たる東海は青く、どこ迄も広がっている。
赤く輝く朝日をひたして目出度さに溢れている。

6)「自治」昭和8(1933)年5月1日発行第10

巻・第5号「文苑」56頁掲載

ミズノトリ
昭和 癸酉二月十八日開忘機吟社

例集於四溪光風莊席上課題

山館聴鶯

松籟・石塚 参

山角雲收澹曙輝 疎梅影護小柴扉
黄鶯似助間中趣 啼在花間不散飛

(読み)

昭和八年二月十八日、忘機吟社ノ例集ヲ四溪ノ
光風莊ニ開ク、席上ノ課題。

山館鶯ヲ聴ク

山角雲收マリ曙輝澹シ、疎梅影ハ護ル小柴ノ扉。
黄鶯助ケルニ似タリ間中ノ趣、啼イテ花間ニ在
ツテ散飛セズ。

(解説)

昭和癸酉(きちゅう)8年2月18日、忘機吟社
(漢詩の会)の例会を四溪(岐阜県・現・池田町附
近と思われる)の「光風莊」で開催した。課題は
「山館聴鶯」つまり、山中の旅館で鶯の声を聴く、
である。

山の頂上の雲は收まり、夜明けの輝きは淡く
あっさりしている。まばらに咲いている梅の木の
陰が小柴の扉を護っているようだ。

黄鶯(朝鮮鶯とも云う)はこの静かな情景を助
勢しているようだ。

花の合間を鳴きながら行き来しても飛び去ろう
とはしない。

7)「自治」昭和9(1934)年2月15日発行第11

巻・第2号「文苑」55頁掲載

歳晩書懷

松籟・石塚三郎

瓶梅花底夜三更 懺後襟懷冰雪清
只恐時艱救無策 何人公道導群生

甲戌新年

笑酌屠蘇酒一杯 祥煙四壁歳云回
梅凌霜雪花纔綻 未聴黄鶯呼友来

(読み)

歳晩書懷

瓶梅ノ花底夜三更、懺後ノ襟懷氷雪清シ。
只ダ恐ル時艱ヲ救ウニ策無キヲ、何人カ公道群
生ヲ導カンヤ。

甲戌ノ新年

笑ッテ酌ム屠蘇ノ酒一杯、祥煙ノ四壁歳云ニ回
ル。

梅ハ霜雪ヲ凌ギ花纔ニ綻ブ、未ダ聴カズ黄鶯ノ
友ヲ呼ンデ来タルヲ。

(解説)

年の暮に当って思いを述べる。

花瓶に飾った梅の花を見ている内に夜も更け
て、日頃の行いを悔いた後は、心の中は氷雪の様
に清らかである。

然し乍らこの今の世の中の困難さは、救うにも
策がなく、一体誰が私心のない公平なやり方で
人々を導くのだろうか。

きのえいぬの新年にあたって

笑って屠蘇の酒を一杯酌み、目出度い雰囲気
が貧しい我が家にもやって来た。

梅の花は霜雪を凌いで、花はようやく綻んで来
たが、未だ鶯の仲間を呼ぶ声は聞こえて来ない。

8)「自治」昭和9(1934)年9月15日発行第11
巻・第9号「文苑」54頁掲載

謁楠河州祠

松籟・石塚三郎

楠公忠節世無俦 憑弔低徊涙不收
自誓七生殲国賊 精神凜凜幾千秋

(読み)

楠河州祠ニ謁ス

楠公ノ忠節世ニ俦無シ、憑弔低回スレバ涙收マ
ラズ。

自ラ七生ヲ誓ッテ国賊ヲ殲セントス、精神凜凜
幾千秋。

(解説)

河州・楠神社に参拝して、

河内の国の土豪で南北朝時代の武将・楠正成は、
千早城に立て籠もり、後醍醐天皇に依じて兵を挙げ、幕府の大軍を破った忠節は世にも稀な類の無

いものであった。

この祠に参拝して弔い、境内を歩き昔を想起す
ると立ち去りがたく、涙が出て来て止まらない。

自ら七度生れ変って国賊を滅ぼそうと誓いを立
てたその精神は勇ましく、後世に長く幾千年も傳
えられる事であろう。

9)「自治」昭和10(1935)年1月15日発行第
12巻・第1号「文苑」51頁掲載

歳晩書懷

松籟・石塚三郎

歳云暮矣感如何 回首半生如夢過
援筆自嘲才力薄 一篇枉草送窮歌

乙亥新年

旭日瞳々四海新 郷雲爛々遶楓宸
偏欽雨露萱堂建 九十三回又遭春

(読み)

歳晩書懷

歳云暮矣如何ニ感ゼン、回首半生夢ノ如ク過グ
ル。

援筆自嘲才力薄シ、一篇ノ枉草窮歌ヲ送ラン。

乙亥新年

旭日瞳々四海新ナリ、郷雲爛々トシテ楓宸ヲ遶
ル。偏欽雨露萱堂ヲ建ル、九十三回又遭春。

(解説)

年の暮に思いを綴る。

年もここに暮れて今年一年間の感想はどうだろ
うか。かえりみれば我が人生の半分は夢の如く過
ぎ去って終った。

筆で文章を作ろうとしても、自分の才力が薄い
のをあざ笑うばかりだ、一篇の詩稿を苦し紛れに
作って送ろう。

昭和十年乙亥の新年によせて

日の出の太陽は赤く燃える様に輝き、四海皆新
たになった。目出たい雲があざやかに光り輝いて
皇居をつつみ込んでいる。

天の恵みにより母が健やかな事がひとえに喜ば
しく、九十三歳の春がまたやって来た。

(註) 母・石塚シュ、天保14(1843)年2月10日生、昭
和12(1937)年1月25日没、95歳

10)「自治」昭和10(1935)年12月15日発行第
12巻・第12号「文苑」37~38頁掲載

訪克堂公賦

松籟・石塚 参

古風庵浄俗塵空 路自竹間幽處通
庭樹深々山咫尺 吟聲時起白雲中

松籟石塚君見訪古風庵喜賦

克堂・若月 禮

酒於浴後快心傾 詩自醉中随意成
溪水潺湲琴筑響 絶無塵處足幽情

次韻克堂公詩

松籟・石塚 参

天下蒼生興望傾 待他経国大機成
優游南豆好風色 品水評山無限情

(読み)

克堂公ヲ訪レテ賦ス

古風庵ハ浄クシテ俗塵ムナシ、路ハ自ズカラ竹
間ノ幽處ニ通ズ、

庭樹ハ深深トシテ山ハ咫尺、吟声時ニ起ル白雲
ノ中、

松籟石塚君見訪古風庵喜賦

酒ハ浴後ニ於テ快心ニ傾ク、詩ハ醉中ニ自ラ随
意成リ、
溪水ハ潺湲琴筑ノ響アリ、塵處絶無ニシテ幽情
ニ足ル、

次韻克堂公ノ詩

天下蒼生興望傾キ、待地径国大機成ル、
優游南豆風色ヲ好ム、品水評山無限ノ情、

(解説)

若槻克堂公を訪れて詩を作る。

古風庵(若槻禮次郎の家)は浄くして浮世の塵
やけがれがない。路は竹間より静かな処に通じて
いる。

庭樹は奥深く静まりかえり、山はすぐそこ迄接
近している。時たま詩を吟ずる声が起り、白雲の
中に吸い込まれる様に消えて行くようだ。

松籟・石塚君が古風庵を尋ね来て、喜しい一首
を作る。

入浴後のお酒は心地よく、みち足りて来たの
で、ほろ酔い気分て心まかせに詩を作ってみた。

谷川の流れはさらさらと、まるで琴筑の響き
の様だ。世俗らしさがまったく無く、風雅な気

持ちである。

克堂公の詩をまねて同じく詩を作る。

若槻公に天下の人々の期待がかかっているが、
国を治める天下の政治を成す事はさておいて、な
ごやかでゆったりとした南伊豆のこの地の眺めを
楽しんで日を送り、水を品定めしたり、山を評し
たりする事は、この上もない良い気分である。

11)「自治」昭和11(1936)年1月15日発行第
13巻・第1号「文苑」61~62頁掲載

歳晩書懷

松籟・石塚三郎

不唱人生行路難 身逢聖代一家安
子陵千古流風遠 誰著羊裘把釣竿

丙子新年

五彩雲翻瑞色新 謳歌聖徳此佳辰
萱堂九十又加四 私喜世間稀有春

(読み)

歳晩書懷

人生行路難シキヲ唱エズ、身ハ聖代ニ逢イ一家
安シ、

子陵千古流風遠ク、誰カ羊裘ヲ著ケテ釣竿ヲ把
ラン、

丙子新年

五彩雲翻リ瑞色新ナリ、聖徳ヲ謳歌ス此ノ佳辰、
萱堂九十又四ヲ加ウ、私ニ喜ブ世間稀有ノ春ヲ、

(解説)

年の暮に思うこと

人生の世渡りが難かしい事はさておき、この身
は、天子様の治める太平の御代に出合い一家は安
穩に暮している。

子陵(註・嚴光のあざな。後漢餘姚の人。本名
は莊。明帝の諱を避けて改姓す。少時光武帝と遊
学し、光武即位の後、諫議大夫に召されたが就か
ず。富春山に耕し歳八十餘で卒す。後人、その釣
をした処を嚴陵瀬と呼ぶ)が昔残した良い評判や
慣わしは千年も伝わっているが、それもだんだん
遠くなり、今どき嚴光のように粗末な羊の皮衣を
着て川畔で釣をする人は誰もいない。

嚴光のような人が、世に出ることは無いのかな
あ。

年改まり「ひのえね」新年を迎えて

美しい五色の雲が空にかかり、目出度い景色が

新鮮である。天子の徳を謳歌するこの良き朝を迎えた。

母親は九十四歳になったが、世の中でも稀に経験できる嬉しい春を迎えられた事を、ひそかに喜んでいる。

※当時は90歳を越える長寿の人は稀有であったので、その稀有の長生きをしている母の居る幸せが嬉しいの意。

12)「自治」昭和11(1936)年3月15日発行第13巻・第3号「文苑」22頁掲載

赤谷鉄道開通十周年祝賀会席上

松籟・石塚 参

百里比隣驀地奔	厚生利用聖時恩
雲迷絶谷窮山裏	一路開来萬富源
疎水開山功不空	喜看産物與年豊
碧天紅葉相輝映	萬歳聲飛銅笛中

(読み)

赤谷鉄道開通十周年祝賀会ノ席上

百里モ比隣地ヲ驀シテ奔ル、厚生ノ利用聖時ノ恩。

雲ハ迷ウ絶谷窮山ノ裏、一路ヲ開キ来ル萬富ノ源。

疎水山ヲ開キ功空シカラズ、喜ビ看ル産物年ト共ニ豊カナリ。

碧天紅葉相輝映ス、萬歳ノ聲飛ブ銅笛ノ中。

(解説)

赤谷鉄道開通十周年記念祝賀会に出席して。

百里も隣の様に近くなり、まっしぐらに汽車が走る。生活を便利に出来る事は、この太平の御代のお陰である。

雲は、険しく深い谷や地の果てのような山にさまよう如くかかっているが、その様な処にも鉄道が開通して、直通で多くの富をもたらす源となっている。

山を切り開き、人口水路を作った功績は大きい。よく見ると、嬉しい事に産物は年を追うごとに豊かになった。

ぬける様な青空と、もえる様な紅葉は共に輝きはえて、萬歳の声が汽笛に交じってわき起るのが聞こえてくる。

13)「自治」昭和11(1936)年4月15日発行第13巻・第4号「文苑」4頁掲載

香山唱和 其一

石塚松籟

嵐氣空濛四面浮 山村無處不清幽

埋溪躑躅紅如娟 一道潺湲蕪影流
(読み)

香山唱和 其一

嵐氣空濛四面ニ浮ビ、山村處トシテ清幽ナラザル無シ。

溪ヲ埋メル躑躅ノ紅媚ビルガ如シ、一道汙湲トシテ影流ニ蕪ス。

(解説)

原本には「香山唱和・其一」石塚松籟、「其二」高取無窮、「其三」角田孤峰の次韻が掲載されていることから「香山」で詩を互いに贈答し合ったものと考えられる。

香山は、日本百名山・妙高山 2446 メートルと思われる。即ち古来カルデラ火山として珍らしい事もあり、妙高山の中心の山を「古志の中山」と呼んでいた。中山が「名香山」(なかやま)となり、その後「名香山」の読みが「名(みょう)香(こう)山(さん)」に変化し「名香山」をさらに飾って、妙香(高)山となった。香山はその略。

すなわち、嵐氣(山に立ちこめる青いもや)がぼんやりとしていて、四方を包み込むように浮び、山村はすべて清らかで奥深い。

谷を埋めつくす「つつじの花」は、紅の様に赤く媚びるように咲いている。

一筋の水が、さらさらと影をひたして流れている。

6. む す び

原本の「文苑」から当該漢詩をコピーし、原文の読みや解説をし易い様に旧漢字、異体字、誤植等を正し、慎重を期する為、詩文を打ち直してから作業に取りかかった。

かつて石塚先生と漢詩についてご縁があった日本漢詩学会々員の方にもご協力とご指導そして監修をいただいた。

漢詩は奥の深いものであり、作者でなければわからない点が多々あった様に思える。

橋本晴夫氏、住田高市氏、成海修一氏、井出 大氏、飯島重衛氏、福原豊弘氏、窪寺 啓氏(順不同)に心から感謝申し上げ、故石塚三郎先生のご冥福をお祈り致します。

参考文献

1) 佐藤泰彦：祖父梅次郎の盟友・石塚三郎の事跡。日本

- 歯科医史学会誌, 第 24 巻 1 号 (2001 年 2 月)
- 2) 佐藤泰彦: 石塚三郎旧蔵・新潟県歯科医師会日誌〜草創期の歯科界を探る〜[その 1〜2] 日本歯科医史学会誌, 第 25 巻 2 号 (2003 年 10 月)
 - 3) 佐藤泰彦: 石塚三郎旧蔵・新潟県歯科医師会日誌〜草創期の歯科界を探る〜[その 3〜5] 日本歯科医史学会誌, 第 25 巻 4 号 (2004 年 9 月)
 - 4) 福島春秋: 第 2 号・歴史春秋社発行. (2004 年 8 月)
 - 5) 石塚三郎著: わが友・野口英世・(財) 社会教育協会発行 (1953 年 5 月)
 - 6) 福原豊弘著: 愛山喜雨, 福原愛山詩文集 (1990 年 11 月)
 - 7) 福原豊弘著: 愛山甘露, 福原愛山詩文集 (1999 年 5 月)